

Implementation Guidelines of Presentation Tours in Large Classes

Yumi TATSUSHIMA†

Abstract

The focus of this report will center upon active learning. In our junior college, “Presentation” is a compulsory course for freshmen students. Recently we have had an increase in the number of students participating in this course. I tried to conduct this course in a manner providing positive results equally for 185 students. In this report, I will present the implementation and the points of preparation.

Keywords

Active-learning, presentation, large class

大人数プレゼンテーションツアーの実施要領

辰島 裕美†

キーワード

アクティブ・ラーニング, プレゼンテーション, 大人数クラス

1. はじめに

中央教育審議会2018年の「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」では、「生涯学び続ける力や主体性を涵養するため、大規模教室での授業ではなく、少人数のアクティブ・ラーニングや情報通信技術(ICT)を活用した新たな手法の導入が必要」といった期待がある。さらに、評価の点では「学年ごとの期末試験での評価で、学生が一斉に進級・卒業・修了するという学年主義的・形式的なシステムではなく、個々人の学修の達成状況がより可視化されることが必要」と記している。設置科目の目標達成に、これらを視野に入れた授業の手

法の一つを報告する。

本学短期大学部では「プレゼンテーション」が1年次後期に担当されている。当該科目は必修科目として入学者が全員履修する。プレゼンテーションの演習は、相互に学びあう点から、大人数のほうが有効な点もある。そこで、公平で平等な発表の機会と、長すぎる待ち時間や一方的に聞くだけの時間がないよう配慮し、小グループでのプレゼンテーションツアー(以下プレゼンツアー)を企画した。基本的に、約185人の受講生を36人程度の5会場に分けて、1つの会場では4人ずつの9グループを構成した。

† ytatsu@seiryu-u.ac.jp (Women's Junior College, Kanazawa Seiryu University)

本稿では、科目授業最後のイベントであるプレゼンツアーとそのための準備の部分に焦点を当てる。

2. 実施当日の活動

2.1. 位置づけとテーマ

今回のプレゼンツアーとは、主体性を発揮して相互学習と評価を行う、アクティブ・ラーニングの手法である。グループが会場内に発表するブースを設置し、同じ内容のプレゼンテーションをメンバーが交代で繰り返して行う。発表しない時は聴衆となつてほかのグループの発表を見て回る。

イベント当日は授業終盤13.14回目の2コマ連続3時間を割り当てた。プレゼンテーションを作る部分と発表する部分のそれぞれ約1時間で、休憩と振返りを含め3時間の計画を立てた。

観光コースの企画という課題に対して各自が数時間前の授業などで準備した素材やアイデアを持ち寄る。当日構成された初対面の学習者を含む4人1グループで一つのコース案を作る。メンバーの4人はそれぞれが別の役割を持つ。

テーマは「外国から大学生一家がやってくる」との設定で、共に学び楽しみ、友好を深めるために自分たちが案内するコースを目指した。

学習者はあらかじめ4つの要素のいずれかについて準備し、当日組まれたメンバーでコースとして完成させ、発表資料の作成、発表の打ち合わせなど練習を行うまでが前半約70分の作業である。後半は、全員が複数回プレゼンを担当し、かつ、ほかのグループの観光コースを視聴しながら相互評価する。

4人グループの構成は、食、文化、体験、場所の4つの要素が一人ずつ重複しないように組んだ。また、プレゼンは観光コースを発表し評価するもので、対象者（プレゼンの聴衆）

は学びあう学習者同士であり、外国人大学生や家族ではない。

2.2. 企画と発表資料作成

185名の学習者が4人構成の9グループで活動するために、5つの情報演習室を使用した。全員が一人一台のPCを使える環境である。学習者は当日朝に、それぞれ割り当てられた教室に入り自分のグループのブースに配置した。初対面を含むメンバーと自己紹介からスタートした。その後、自分の準備した要素の資料を紹介しあい、コースを決め、発表のための資料を作成した。当日の欠席などで4要素がそろわず、欠けてしまうグループもできた。チームで可能な範囲で臨機応変に対応できた。ここまでで70分の予定、15分休憩をとる。

2.3. プレゼンツアーの実施

次に60分の予定で、プレゼンツアーを実施した。各会場には9ブース設置し、ツアーの順番がわかりやすく回りやすいように番号を振った。発表時間と質疑応答で5分、移動に1分の流れを8回繰り返した。

各チーム内で、全部で8回の発表について、誰が何回目の発表を担当するかを決めた。それを配布したハンドアウト（付録資料1）に、各自が記入したことで、スムーズに行動できていた。8回の発表は混乱なく予定通り完了した。1～8回の発表が進行する中で、学習者が、自分の行動、つまり発表する回とツアーのブースを正確に認識することは、スムーズな運営のカギであった。

3. 事前の準備

3.1. 概要の理解のための説明

ルールに則ったスムーズな行動は、大人数のイベントにおける成功のカギといえる。今回のように分刻みの複雑な動きを要求される場合は特に、事前のレクチャーが必要である。全体がどのように流れるのかを知ることが、次、その中で自身がどんな順序で何をするのかという

認識を助ける。単純な動きであれば、周囲の流れに合わせることで問題はない。しかし、プレゼンターはグループ活動ではあるが、個々人が自立した行動をしないといけないので、主体的な心構えも必要である。事前説明の手順は表1のとおりである。

まず、活動の目的や計画全般、複雑で個人的な行動であること、具体的な動きの規則性を伝えた。何回目の発表で、誰がどこで発表/聞くのかの規則性と動き方は複雑なので、順序良く伝えて理解させる必要があった(図1-14参照)。

表1, 事前説明の手順

1. プレゼンツアーとは何かを理解
2. スケジュールとグループ構成(図2)
3. 動き方のルールを知る(図1)
 - ①. 発表回ごとの当番制(図2-5)
 - ②. 聴衆としての回り方(図6-9)
 - ③. 会場のブースの配置(図10-14)

図1. 説明スライド資料1

プレゼンツアー

- 5分間のプレゼンタイムを8回繰り返す
- 部屋の中を決められた通りに回ります
- 全員が、2回プレゼンをします
- 全員が、6回プレゼンを聞きます

図2. 説明スライド資料2

1グループには4人

- あ ABCDクラス
- い ABCDクラス
- う EFGHクラス
- え EFGHクラス

図3. 説明スライド資料3

8回のプレゼン G1の場合

1. あ=1 である, いうえ= 2 である



図4. 説明スライド資料4

8回のプレゼン G1の場合

1. あ=1 である, いうえ= 2 である
2. あ=1 である, いうえ= 3 である
3. い=1 である, あうえ= 4 である
4. い=1 である, あうえ= 5 である
5. う=1 である, あいえ= 6 である
6. う=1 である, あいえ= 7 である
7. え=1 である, あいう= 8 である
8. え=1 である, あいう= 9 である

図5. 説明スライド資料5

8回のプレゼン G1の場合

1. あ=1 である, いうえ= 2 である
2. あ=1 である, いうえ= 3 である
3. い=1 である, あうえ= 4 である
4. い=1 である, あうえ= 5 である
5. う=1 である, あいえ= 6 である
6. う=1 である, あいえ= 7 である
7. え=1 である, あいう= 8 である
8. え=1 である, あいう= 9 である

場所

図6. 説明スライド資料6

ある部屋のプレゼン 1回目

| | | |
|--------|--------|--|
| あ:プレゼン | いうえ:見る | |
| | | |
| | | |

図7. 説明スライド資料 7

ある部屋のプレゼン 2回目

| | | |
|--------|--|--------|
| あ：プレゼン | | いうえ：見る |
| | | |
| | | |

図8. 説明スライド資料 8

| | | | | | |
|--------|--------|--|--------|--|--------|
| 1回目 | | | 2回目 | | |
| あ：プレゼン | いうえ：見る | | あ：プレゼン | | いうえ：見る |
| | | | | | |
| | | | | | |

図9. 説明スライド資料 9

| | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|--|--------|
| あ：プレゼン | いうえ：見る | | あ：プレゼン | | いうえ：見る |
| | | | | | |
| 3回目 | | | 4回目 | | |
| い：プレゼン | | | い：プレゼン | | |
| | | あうえ：見る | | | |
| | | | | | あうえ：見る |

図10. 説明スライド資料10

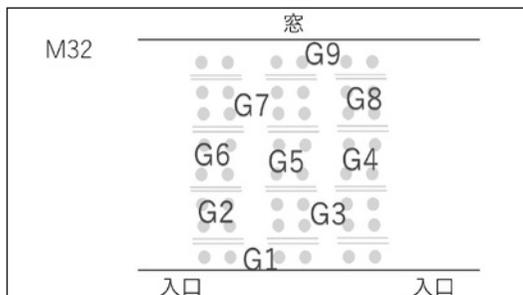


図11. 説明スライド資料 1

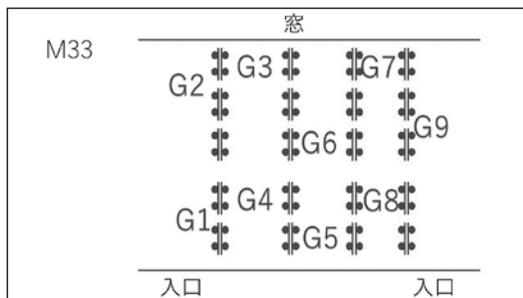


図12. 説明スライド資料12

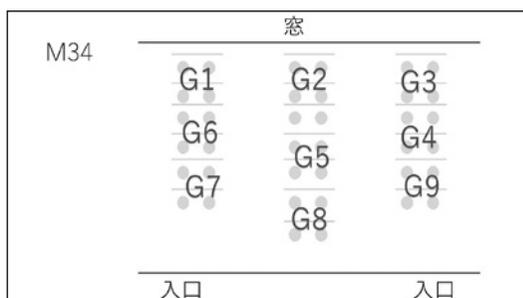


図13. 説明スライド資料13

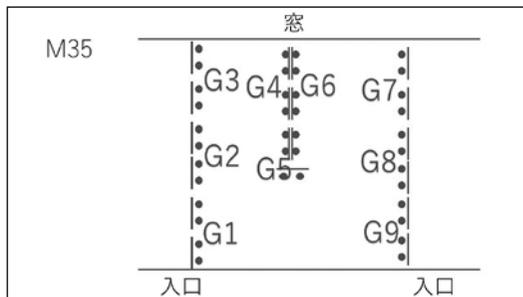
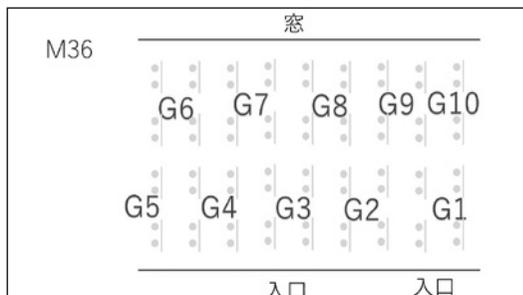


図14. 説明スライド資料14



3.2. 役割分担と小道具の活用

なるべく公平に担当する要素やグループ, 会場を決めるために, イベント前の2回の授業で, 布石を打った。抽選は, 学習者から不平が出にくい方法である。

11回目の授業では, 学習者が抽選で引き当てた座席に着席し, 近くの4人をこの日のグループとした。4人で4つの要素である食, 文化, 体験, 場所を分担して, 観光コースを作る練習をした。これは, 4人で担当を決めることで, 4つの要素の担当者を偏りなく決める目的もあった。

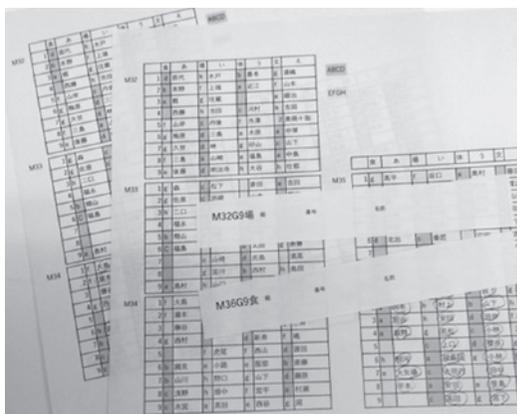
12回目の授業では, ジグソー法からヒントを得た方法(詳細は次項で述べる)でのグループ活動を行うために, 同じ要素の学習者を近くに着席させた。そこで, 次の抽選を行った。これは, 当日の会場とグループを決めるものである。図15のような短冊形の紙片を4つの要素ごとに4つの箱に入れ, 学習者の座席に回して各自が1枚を取った。食を担当する学習者は食の箱から, 文化を担当する学習者は文化の箱から紙片を取る, といった方法である。紙片の左側にはあらかじめ会場とグループの番号が印刷されており, 1週間後のイベントでの会場とグループを知る。

図15. 会場とグループを決める抽選紙片の例

| | | |
|-------------|----|----|
| M32 G2 食 組 | 番号 | 名前 |
| M33 G9 文化 組 | 番号 | 名前 |
| M35 G4 体験 組 | 番号 | 名前 |

その後, 紙片の右側に自分の名前等を記入して再提出させた。科目担当者は, 集めたこの紙片から, 当日の会場分けとグループ分けの表を作成した(図16)。当日は要所に張り出し, 学習者が自分のグループのメンバーを確認した。事前授業での欠席者と, 当日授業欠席者のグループメンバー再編成に便利であった。授業後, 学習者がリフレクションを記入した時のメンバー確認にも使った。

図16. 会場とグループ分けの表と紙片



3.3. 実際に動く訓練

動きの混乱は時間のロスであり, ムードを崩壊させ, 学習者のやる気も消滅する。それを回避するためには, 事前の動き方の練習が効果的である。頭で理解できていても, 実際に動けないことや, 間違えることも多い。各自が担当する要素の知識を情報交換する際に, ジグソー法からヒントを得た方法で, 実際に動きの練習を取り入れた。

12回目の授業では, 同じ要素を担当する学習者同士がまとまって着席し, グループで活動した。一定時間情報交換をした後, 座席を変更し, 同じ要素を担当する違うメンバーで新たなグループを形成し, 情報交換を行うことを複数回繰り返した。この動きは, 別の科目でも時折実施していた。まず, グループの番号とメンバーの番号を2種類認識させる。次のメンバーチェンジの際には, グループ番号とメンバー番号を足した数のグループへ移動する。この方法だと, 全員が必ず違うメンバーとグループになり活動することができる。

この方法は, 自分の発表を繰り返して練習できるのメリットと, 多くの人から情報を得られるメリットがある。傾向を知るばかりではなく, さらに, 動きの練習になることや, 偶然居合わせた初見のメンバーと話す機会になった。

4. 学習者の中の課題と活動手法

学習者が授業の後に行ったりフレクションでは、活動は楽しく進めることができ、満足度も高いという意見が多かった。意外に多くの学習者が、初対面の人とグループになって、企画を作り直すことができるのかという不安が事前にあったことを記入した。

かつて数年間は、「プレゼンテーション」という科目名が表すように、最後の成果発表会では、数名の選ばれた学習者が大勢の前でプレゼンテーションを行っていた。しかし、一人でも多くの学習者が、何らかの形で成果発表できるように、ポスターセッションを行ったり、学習者から有志を募って、運営自体を託してみるなど、工夫を重ねてきた。大勢の学習者の集団ではあるが、学年によっても、特徴が異なるため、臨機応変な活動の選択が必要である。科目の目的に対して、学習者の要望を盛り込むことができる手法を適切に組み合わせたい。

5. おわりに

この科目が必修科目であることも考慮し、近

年では小集団の活動で、コミュニケーションの基本である、相手への配慮の重要性と表現方法を、体験から気づかせる方針である。そんな工夫から今年の活動が試行された。プレゼンツアーの実施要領について一例を提示し、他者からの意見を得ることで研鑽したい。

大学では、ディプロマポリシーからカリキュラムポリシーが決まり、シラバスを作成して授業の実施になる。科目担当者は、社会がどのような人材を求めているのかという点を意識せねばならない。そして、自分が担当する科目の中で、目の前の学習者に対して、どのように気づかせ学ぶ意味を見出させるのかという点で教授法について工夫を重ねる。それは、学習者本位を基本とし、学習者の興味関心や日常に近いテーマを題材にして、活動に楽しみがあることで主体的な姿勢を期待できる。そして、その成果は、学習者の将来に還元されるものであってほしい。このように考えて、主体的な学びをアクティブ・ラーニングを実施した。

この活動から、学習者は何を得たのかを、次に明らかにし、次年度へつなぎたい。

【付録】資料1

1218大会評価表p.xlsx - Excel

ファイル ホーム 挿入 ページレイアウト 数式 テータ 校閲 表示 エクセル統計 操作アシ サインイン 共有

R30

1 注意! 未記入など、不備のあるファイルは採点しない 2018/12/18 プレゼンテーション大会

2

3 右の欄を入力

4 学籍番号

5 クラス

6 名前

7 担当 会場沖又のいずれか

8 部屋番号 32~36のいずれか

9 グループ番号 1 1~9のいずれか

9 採点のポイント (0か1, 採点不可能は -)

10 A. 大学生ファミリーが満足できるともに楽しめる内容かどうか?

11 B. スライドを含めたプレゼンテーションや質疑応答から歓迎やもてなしの心が伝わってきたかどうか?

12 C. コストや時間、季節などの配慮があり全体的にコースとして成立するかどうか?

13 採点表について

14 ①自分が発表する回の欄には○を記入 (基本的に1人2回プレゼンして6回聞く)

15 「食」さんは1.2回目に発表、「端」さんは3.4回目、「侍」さんは5.6回目、「文」さんは7.8回目にプレゼン

16 欠席者などの理由でメンバーが4人でないグループは、誰かが3回発表するなど臨機応変に

17 ②自分がプレゼンターで回るグループ番号を記入 (基本的に自分のグループ番号+通し回番号)

18

19 プレゼンテーションについて

20 プレゼンテーションは2~3分で、質疑応答合わせて5分間で8回実施します。

21 自動で切り替わる5分タイマーのスライドを使います。移動時間は20秒程度です。

22 スライドに従って速やかに行動してください。

23

| 通し回 番号 | ① プレゼン する担当 | ② 見て回るグ ループ番号 | A | B | C | 合計 | メ | モ |
|-----------|-------------------|---------------------|---|---|---|----|---|---|
| 24 | | | | | | | | |
| 25 | 1 | 2 | | | | 0 | | |
| 26 | 2 | 3 | | | | 0 | | |
| 27 | 3 | 4 | | | | 0 | | |
| 28 | 4 | 5 | | | | 0 | | |
| 29 | 5 | 6 | | | | 0 | | |
| 30 | 6 | 7 | | | | 0 | | |

準備完了

70%

